

酒場歌謡が生んだティロルの観光地

——クーフシュタインとクーフシュタイナー・リート——

山田 徹 雄

Kufstein und Kufsteiner Lied “Die Perle Tirols”

Tetsuo YAMADA

要 旨：クーフシュタインを、ティロルを代表する観光名所にしたクーフシュタイナー・リートの発生史とそれを世界的なヒット曲に導いた経緯を詳述し、その間に展開された著作権を巡る論争を紹介した。

キーワード：クーフシュタイン、クーフシュタイナー・リート、ティロルの真珠、カール・ガンツァー、エゴン・フラウエンベルガー

はじめに

「クーフシュタインには名所がわずかしかない、だが世界的ヒット曲がある。」

『ベアリーナー・ツァイトゥング』は、2001年12月29日にこう伝えた⁽¹⁾。

クーフシュタイン（Kufstein）をこれほど雄弁に伝える修辞はない。筆者を含め、クーフシュタインを観光で訪れるものは、クーフシュタイナー・リート（Kufsteiner Lied）の伝えるティロルのロマンに魅かれてやって来るといっても過言ではなからう。

この記事には、さらに次のような逸話が紹介されえている。

かつてティロルのスキー製造業者、カール・クナイスル（Karl Kneissl）が会議のために日本を訪れた。その後に行われたくつろいだ会合で、会議に出席していた者たちがそれぞれ自分の故郷の歌を歌うことになった。カールは、クーフシュタイン・リート（Kufstein-Lied）の第1節をkarouじて、低い声でうたった。すると2人の日本人が立ち上がり、それに続く第2節と第3節を朗々と歌った、しかも胸を張って⁽²⁾。

スキー板メーカー、クナイスルは、19世紀に車輻メーカーとして設立され、1900年にクーフシュタインにおいて、最初のスキー板を制作した⁽³⁾。

本稿では、クーフシュタイナー・リート誕生の契機、原作者と言われているカール・ガンツァー（Karl Ganzer）、またクーフシュタイナー・リートが世界的なヒット曲となった経緯、クーフシュタイナー・リートの著作権をめぐる訴訟について論じる。

上記の問題については、ザルツブルク・モーツァルテウム大学（Universität Mozarteum Salzburg）元教授でありティロル民族音楽に関して多数の業績を残したトーマス・ヌスバウマーによる研究論文「誰がクーフシュタイナー・リートを書いたのか？」（Nußbaumer [2004]）が最も詳しい⁽⁴⁾。

また、トーマス・ヌスバウマーの研究に依拠しつつ書かれたアンドレアス・エストナー「郵便局員の家から世界的ヒット曲」（Estner [2007]）には、クーフシュタイナー・リートの原曲の楽譜も掲載され、同曲誕生の経緯が分かり

やすく記されている。

以下の記述は、これら2つの論文に依拠しつつも、その後の著作権をめぐる訴訟の展開については、新聞記事、裁判記録を参考に論を進める。

トーマス・ヌスバウマーは、研究論文の冒頭で、クーフシュタイナー・リート原作について、

「バスの運転手なのか、飲食店の主人なのか？(ein Buschauffeur oder ein Gastwirt?) ビールのコースターが音楽史においていかなる意味を持っているのであろうか？そして人気の続く流行歌(Dauerbrenner)の父は誰であろうか？ミュンヘンの無鉄砲であるのか、それともやはりポストバスの運転手であろうか？あるいは、警察官の過去をもつ輩であろうか？」⁽⁵⁾

と記した。いずれもクーフシュタイナー・リートの著作権をめぐる訴訟において問題とされた点である。

民族音楽としてのクーフシュタイナー・リートの評価は著しく低い。かつて昆虫学者であると同時にティロル民族音楽研究の大家であったフランツ・フリードリヒ・コール(Franz Friedrich Kohl)は、クーフシュタイナー・リートを民族音楽と呼ぶことをきっぱりと拒否している。伝統的な民族音楽が落ち着いたメロディーラインであるのに対して、クーフシュタイナー・リートは感傷的すぎるし、半音階に身を委ねるメロディーラインは「土着的」(bodenständigen)とはいえず、「通俗歌謡」(volkstümliches Lied)、もしくは商業的な「民俗音楽」(Folklore)と評価した⁽⁶⁾。

1. カール・ガンツァーと「ツェギン」

クーフシュタイナー・リートは、1947年、カール・ガンツァー(1922~1988年)によって作詞・作曲されたというのが定説となっている。

ガンツァーは、ワイシャツの袖をまくりあげ、「ツェギン」(Zugin)を胸に押し当てたり、あるいは左肩に吊るしていたといわれている⁽⁷⁾。

ガンツァーは、1920年にティロル州のブリクレック(Brixlegg)に生を受けた。かれは、バイオリンを演奏するつもりであったが、事故で指を一本失い、「ツェギン」に手を伸ばすことになったと伝えられている⁽⁸⁾。

ティロル方言の「ツェギン」とは、どのような楽器であろうか。

アコーディオンの一種にシュタイリッシュ・アコーディオン(Steirische Harmonika)という楽器がある。その意味するところは、シュタイヤーマルク式アコーディオンであり、アルプスの民族音楽の演奏に現在でも用いられている。蛇腹楽器で、元々、ダイアトニック式のボタンタイプ“Knöpferlharmonika”であったがまれに鍵盤型もある。これをZugorgel, Zugin, Wanzenpress, Ziach, Ziachharmonie, Harmonieあるいは、単にdie“Steirische”と呼ぶこともある。シュタイヤーマルク式という名称にも関わらず、ウィーンで考案された⁽⁹⁾。

戦間期には音楽学校がわずかしかなかったために、ガンツァーが楽譜を読めなかったことはよく知られている。すべて聞き覚えで演奏することになったのである⁽¹⁰⁾。

かれは、「ツェギン」を「弾いていたのではなく、撫でていた⁽¹¹⁾」といわれていることから、独学で指使いをマスターしたのであろう。

2. クーフシュタインとガンツァー

戦時中、前線にツェギンを携帯していたガンツァーは、モナナからクーフシュタインまで自転車で帰郷した。すでに結婚していたトラウドル夫人(Traudl)とクーフシュタインに居を構え、郵便局に職を得た⁽¹²⁾。

かれの職業について、郵便配達人ともバスの運転手とも記されている。真相は、そもそも郵便局に職を得て(eigentlich bei Post)、最初は郵便配達員(Breifträger zunächst)、その後クーフシュタイン~エアル区間の郵便バスの運転手(dann Postbus-Chauffeur auf der Linie Kufstein-Erl)として勤務していたということである⁽¹³⁾。エアルは

〔画像1〕 現在のガストハウス「アウラヒャー・レヒル」



(2016年8月10日筆者撮影)

クーフシュタイン郡内にあり、受難劇の上演では、オーバーアマーガウより古い歴史を持つ村である⁽¹⁴⁾。

郵便バスは、オーストリアにおいて地域交通を担う公共交通機関として重要な存在であったし、現在でもある程度そうである⁽¹⁵⁾。

ヌスバウマーは、当時クーフシュタインに暮らしていた民族音楽研究者、ヴァルター・ドイチュ（Walter Deutsch）の言葉を引用して、戦後間もなくクーフシュタインには、「ダンス熱」（Tanzwut）、つまり娯楽と気分転換を求める、燃えるような情熱が支配していたと指摘する。酒場には、圧倒的な数の地域住民が集まり、また若い女性（Mädels）目当てのフランス占領軍兵士がやってきた⁽¹⁶⁾。

そこで演奏家たちは、ナチスのもとでは禁止されていた音楽、アメリカの曲や新しいドイツの曲、ジャズからタンゴに至るまで演奏していた。かれらは、プロ（echt）とアマ（unecht）が未分離で、耳で聞いた音楽、人々が求める音楽を演奏していたのである⁽¹⁷⁾。

このような背景のもとで、クーフシュタイナー・リートが誕生した。

ガンツァーは、乏しい郵便局員の給料を補うために、ツーギンをもって小銭を稼いでいた。かれは、仲間とともに、「ペンデルストアナー」（Pendelstoana）というグループ名で、イン川岸のすぐ上方にあるガストハウス「アウラヒャー・レヒル」（Auracher Löchl）で定期的に演奏していた⁽¹⁸⁾。

ガンツァーは、ダイアトニックタイプのアコーデオンでは、聴衆が求める現代的なダンス音楽に対応できないことにまもなく気づいた。新しいクロマティックタイプのアコーデオン（chromatische Akkordeon）に乗り換え、「アドリブ」（Herumimprovisieren）を演奏しているときに、クーフシュタイナー・リートへと通じるメロディーを思いついた。歌詞の第1節は、クーフシュタインののどかな旧市街で、路線バスを運転しているときに、第2節と第3節は、聴衆を観察しながら思いついたといわれている。それは、1947年のことであった。その2年後にペンデルストアナーは、ガストハウス・ヴァルトゥル（Gasthaus Waltl）で初めてこの曲を公に演奏し、その歌詞は3枚のビールコースターに残された⁽¹⁹⁾。

3. クーフシュタイナー・リートの原曲

ペンデルストアナーが根城としていたアウラヒャー・レヒルでは、1952年に広告用に折り畳み式絵葉書を製作し、「広告媒体」（Werbeträger）にクーフシュタイナー・リートを印刷・掲載した。楽譜の読めないガンツァーの指示で、

〔画像2〕 クーフシュタイナー・リートの原曲「ティロルの真珠」楽譜



(典拠) ORF, Streit über Holla-di-ri im Kufsteinerlied, 24.07.2009

フランツ・フリードゥルがこの曲を記した⁽²⁰⁾。

〔画像2〕に見られるように、そこには題名「ティロルの真珠」(Die Perle Tirols)の下に「作詞・作曲、カール・ガンツァー、フランツ・フリードゥル編曲」(Text und Musik von Karl Ganzer, bearbeitet von Franz Friedl)と明記されている。また、注目すべきは、現在流布している3拍子のクーフシュタイナー・リートではなく、4/8拍子で書かれていることである。さらに下段には「タンゴとしてのクーフシュタイナー・リート原曲」(Urfassung des Kufsteiner Liedes als Tango)と記してある。

ここから「ラン、バン、バン、バン 原曲はティロル・タンゴであった」(Ram, bam, bam, bam – die Urfassung war ein “Tiroler-Tango”⁽²¹⁾)という主張がなされことになった⁽²²⁾。

確かに「4/8拍子でシンコペーションが想起されるアルゼンチンタンゴとは共通点がなく」「『タンゴ』という表記を用いているのは…曲の性格が『現代的』であることを示すため」という指摘があるが⁽²³⁾、不完全な形にせよ、タンゴという舞曲を意図していたことは間違いのないであろう。

それ以上に重要なことは、ヨーデルの間奏が欠如していることである。

3拍子ではなく、4拍子であること、ヨーデルが欠けていることから、「腕を組んで体を揺する」(schunkeln)のではなく「踊る」(tanzen)ことが目的の曲であり、この点こそ現在のクーフシュタイナー・リートとの大きな相違であると、筆者は考える。

なお、曲の題名は、「クーフシュタイナー・リート」ではなく、「ティロルの真珠」であったことから「ひとつのクーフシュタイナーの歌」(ein Kufstein-Lied)であった。

4. クーフシュタイナー・リートの最初のレコード化

しかしこの歌は、口承で伝えられるうちに、いつしか3/4拍子となり、ヨーデルが間奏に加わるようになった。今日、よく知られているヨーデル以外にリフレインとして、2種類のヨーデルが存在していた⁽²⁴⁾。

1956年、クーフシュタイナーのヨーデルデュオ、シュタットウルマイヤー&ガッサー (Stadlmayr/Gasser) は、オランダのレコードコンツェルン、フィリップスの制作したクーフシュタイナー・リートのシングル盤をオーストリアのフィリップスから発売し、オーストリアで発売当初から驚くほどの売れ行きを示し、「ゴールデン・レコード」(Goldene Schallplatte)を獲得し、ウィーンのエバーレ出版社 (Wiener Eberle-Verlag) から楽譜も出版された⁽²⁵⁾。

シュタットウルマイヤー&ガッサーのレコードは、45回転ドーナツ盤であった。なおクーフシュタイナー・リートはB面に録音され、A面は、ハンス・オッター (Hans Otter) の作った「ヴィルトシェーナウの歌」(Wildschönauerlied)であった。このレコードには、はっきりとクーフシュタイナー・リート「作詞・作曲 カール・ガンツァー」(Musik und Text Karl Ganzer)と記されている⁽²⁶⁾。

〔画像3〕 クーフシュタイナー・リート最初のレコード盤



〔典拠〕 Discogs, Jodler Duo Gasser-Stadlmayr – Wildschönauerlied / Kufsteinerlied

これに対して、ガンツァーは、レコード会社、アリオラ（Ariola）から自ら吹き込んだレコードを発売しようとしたが、この試みは挫折した⁽²⁷⁾。

5. ミュンヘンの音楽プロデューサーの登場

この曲を世界的なヒット曲にしたのは、ミュンヘンの音楽プロデューサー、エゴン・フラウエンベルガー（Egon L. Frauenberger）であった。かれは、複数のレコード会社の契約音楽プロデューサーであるばかりでなく、アマチュアのボクサーを経験し、スポーツレポーター、ラジオの司会者、コピーライター、出版社の執行役員、レコード会社の設立者であると同時に執行役員など多面的かつ精力的な活動を行ってきた⁽²⁸⁾。

かれがハンブルクのフィリップスから「アルプス地方の音楽風になにかを考案するように」（in Richtung alpenländischer Musik etwas einfallen zu lassen）求められたのは、1963年のことであった。その時、かれの心をとらえたのが「ティロルの真珠」であった⁽²⁹⁾。

かれはまず、この曲がオーストリアの著作権管理団体である AKM にもドイツの著作権管理団体である GEMA にも登録されていないことを確認した⁽³⁰⁾。

「ティロルの真珠」の原作者であるガンツァーの住所をクーフシュタインの戸籍課を通じて調べ、この曲をプロデュースする許可を求めた。「ティロルの石頭」（Tiroler Sturschädel）、「頑固なティロル人」（der sture Tiroler）であるガンツァーは、法的な問題に関心を示さず、「俺をそっとしておいてくれ！」（Lässt's ma mei Ruah!）と答えたという⁽³¹⁾。

しかし、フラウエンベルガーは定期的に、午後のおやつをもってミュンヘンからクーフシュタインにやっできて、4年にわたり説得を続けたといわれている⁽³²⁾。

この間に、フラウエンベルガーは「ティロルの石頭」の信頼を得るに到り、1967年11月18日、ガンツァーがフラウエンベルガーに「ドイツにおける出版に関する利用権」（die Auswertungsrechte in verlegerische Hinsicht für Deutschland）を譲渡すること、および GEMA に著作権登録すること、それを代行する権限をフラウエンベルガーに委任することを両者で「契約」した。その契約は、クーフシュタイナー・リートの歌詞が掲載されている絵はがきの手書きでなされた⁽³³⁾。

フラウエンベルガーは時を移さず、GEMA にクーフシュタイナー・リートの著作権登録を行った。ガンツァーは、

それに引き続いて、(オーストリアを除く)世界的な著作権をフラウエンベルガーの会社であるエッフェル・ミュージック出版社 (edition-efel-music münchen) に譲渡した。オーストリアにおいては、前述したように、すでにウィーンのエバーレ出版社 (Wiener Eberle-Verlag) が楽譜出版を行っていた³⁴⁾。

6. 大ヒット曲「クーフシュタイナー・リート」の誕生

フラウエンベルガーは、1969/70年にこの歌のプロデュースに際して、ミュンヘンのヨーデル王、フランツ・ラング (Jodelkönig Franzl Lang) を起用した。このとき、フラウエンベルガーがヨーデル王に対して行った指示は、「誰もが一緒に歌えるように、つべこべ言わず、できるだけシンプルに歌え」(Du must so schlicht wie möglich singen, ohne Firefanze, damit jeder Mensch mitsingen kann) ということであった。フラウエンベルガーは、ラングと共作で、フィリップスから最初のシングル盤を発売し、これが当たったのである。我々が現在、耳にする「クーフシュタイナー・リート」こそ、このとき生まれた³⁵⁾。

エゴン・フラウエンベルガーはこの歌を「大衆受けする」(massentauglicher) ようにしたのである。この音楽プロデューサーは3節の歌詞に簡単なヨーデルを付け加えティロルで歌われてきた様々なヴァージョンをそれと置き換えたのである。「私はこの歌を作ったのではなく、世界へと飛ばたくように作り変えたのだ。私はホラリ・ホラレをかかフランツ・ラング向きにしつらえた。このことが決定的な瞬間であったのだ。」(Ich hab ihn ned erfunden, aber ich hab ihn so bearbeitet, wie er in die Welt nausganga is. Ich hab das Hollarä Hollarä auf den Franzl Lang zugeschnitten. Das ist das entscheidende Moment gewesen.) という彼の言葉は至言である。

1974年に、フラウエンベルガーは自ら経営する企業 edition-efel-music-münchen とともに報道陣に対して25万枚のレコード売上を報告している³⁶⁾。

7. 儲けをめぐる

エゴン・フラウエンベルガーは、マスコミからレコードが何枚売れたかと尋ねられると「私はお金のことについては書いて欲しくない」(Schreib mir ja nix über's Geld) といいつつも、「それ(レコードの販売枚数)は、多分、百万枚、いやそれ以上であろう」(Es wird vielleicht schon eine Million gewesen oder mehr) と思わずもらしている。「よりによってミュンヘン人がティロルの歌で多分大儲けしたこと」(dass sich ausgerechnet ein Münchner mit dem Tiroler Lied vielleicht "eine goldene Nase" verdient hat) を、ティロルの多くの人は苦々しく感じていた³⁷⁾。

一方、ガンツァーは、ミュンヘンの弁護士、オットマール・ジモン (Ottmar Simon) によると、1973年~82年に毎年、4万マルクの印税を受け取っていたということである。かれは、妻トゥラウドゥルとともに、シュヴォイヒ (Schwoich) にペンションを建設し、それに「ティロルの真珠」と名付けた³⁸⁾。ガンツァー家の経営するこのペンションのトップページには「クーフシュタイナー・リートがその作曲者を見いだしたところ」(Dort, wo das Kufsteiner Lied seinen Komponisten fand) と記されている³⁹⁾。

クーフシュタイナー・リートが有名になった1973年、ガンツァーの音楽仲間の一人、ハンス・バウムガルトナー (Hans Baumgartner) は、この曲の著作権をめぐる訴訟を起こした。

かれは元警察官で、のちにブリクセンタール (Brixental) にホップ農園を開いた。かれは、エッフェル・ミュージックに抗議し、この歌を4/8拍子から3/4拍子に編曲したのは自分の功績であること、ヨーデルの作曲にも関与していること、かれと妻のパウラ (Paula Baumgartner) は、アウストロ・ファンク (Austro Funk) の放送に際して、クーフシュタイナーのkolpingザール (Kolpingsaal) で録音し、その歌を初めて、今日知られている3/4拍子で演奏したと主張した。3/4拍子とヨーデルがなければ、この歌はヒットしなかったであろうという理由で、印税の半分を請求したのである⁴⁰⁾。

インスブルック地方裁判所における第一審の判決と提出資料⁴¹⁾およびインスブルック高等地方裁判所における控訴審判決と提出資料⁴²⁾から読み取ることができるのは、以下の内容である。

係争当事者間において一時、和解が成立した。エゴン・L. フ라우エンベルガーはかれの弟であり、当時のパートナーであるエーリッヒ (Erich) およびガンツァー夫妻とともにホップ農園にバウムガルトナー夫妻を訪ねた。バウムガ

ルトナーの経営するガストハウスでの「何時間もの協議」(stundenlangen Auseinandersetzungen)の末、和解が成立した。一枚の紙が取り出され、フラウンベルガーが文書を作成し、バウムガルトナー夫妻を含めて全員が、署名した。フラウンベルガー兄弟はその和解書をミュンヘンに持ち帰ったが、その原本はもはや現れることはなかった。バウムガルトナーが結局、そのコピーを受け取った時、その記載に腹立たしい驚きを感じた。バウムガルトナーが法廷で証言したところによると、和解書には、意味を歪める言葉と文言が後から付け加えられているので、バウムガルトナーにとって、ヨーデルの編曲が経済的な報酬が乏しいように記されているというのだ。かれは、文書偽造があったと異議申し立てをした。裁判所から要求された筆跡鑑定の結果、コピーは原本が修正されたことを立証することはできない、という結論に達した。1982年まで長引いた訴訟手続きにおいて、以前、音楽仲間であったガンツァーとバウムガルトナー、さらには出版社が証言台に立たされた。さらに、歌とヨーデルが2人による作品であるのか、それとも一人の人物の作品であるのかという(結局は明らかになることのない)問題を解明するために、音楽学的な鑑定書が提出された。控訴審において結局、一審の判断が踏襲された。すなわち、バウムガルトナーはクーフシュタイナー・リート作成に一役買ったという証拠を提出できなかった。

折り畳み式の絵葉書を除けば、「白の上に黒で」(Schwarz auf Weiß) → 「文書で」立証できるものが皆無であり、「自筆の文書」(Autographe)がなかった。というのは、ガンツァーもバウムガルトナーも音符が読めなかったからである。

それゆえ、カール・ガンツァーがヨーデルを含めたこの歌、総体の原作者であるという結論を得た。バウムガルトナーの勝ち目が最初から小さかったのは、当然のことながら、かれが、この歌が登場してからようやく20年後に、みずからの著作権を訴えたこと、つまりこの歌が「儲かる」(lukrativ)ようになって初めてであったという状況であった⁴³⁾。

8. ガンツァー死すとも、訴訟は終わらず

エストナーによれば、「カール・ガンツァーは、1988年1月に政治家のように埋葬された。」⁴⁴⁾

「カール・ガンツァーは、クーフシュタインの市営墓地に埋葬された。葬儀には1,000人以上の人々の群れが参列した。市長ジークフリート・ディラーズベルガー博士 (Bürgermeister Dr. Siegfried Dillersberger)」、芸術家マリア&マルゴット・ヘルヴィク (Künstler Maria und Margot Hellwig)、ヨーデル王フランツル・ラング (Jodelkönig Fanzl Lang)、タケオ・イシイ (Takeo Ishii)、それにオクセンフルト吹奏楽団指揮者ゲルマン・ホフマン (German Hoffmann, der Leiter der Ochsenfurter Blasmusik) 並びにプロデューサー、フラウエンベルガー夫妻 (E.L. Frauenberger mit Gattin) など。…クーフシュタイン市庁舎には黒旗が議会の決議に基づいて掲げられた」⁴⁵⁾

ここに参列したタケオ・イシイとは、ドイツで活動していた日本人ヨーデル歌手、石井健雄である⁴⁶⁾。

ガンツァーの作った「ティロルの真珠」は、プロデューサー、フラウエンベルガーのプロデュースによって、世界的なヒット曲、「クーフシュタイナー・リート」へと大化けし、それを歌ったヨーデル王フランツル・ラングをも世界的に有名にした。

「クーフシュタイナー・リート」がヒットしたからこそ、クーフシュタインがティロルを代表する観光地へと成長し、それによって市民が得た利益は計り知れない。クーフシュタイン市民が弔意を示したのも、当然のことであった。

このことは、「クーフシュタイナー・リート」が輝く「真珠」であったといえるであろう。

しかし、著作権をめぐる争いはこれで終わらなかった。

フラウエンベルガーは、2001年にクーフシュタイナー・リートの編曲者として、GEMAに登録された⁴⁷⁾。

このことを、ガンツァーの息子と娘が知ったのは、2005年のことであった⁴⁸⁾。

さらに、末期がんに侵されえていたガンツァー夫人、トゥラウドゥル・ガンツァーは、2001年、死の直前にフラウエンベルガーを前にして、自分がクーフシュタイナー・リートの第2節の生みの親 (Mutter der zweiten Strophe des Liedes) であると認めた。その箇所は

Es gibt so vieles / Bei uns in Tirol / Ein guates Weinderl / Aus Südtirol

という歌詞である⁽⁴⁹⁾。

夫人が南ティロル出身であることを考えると、Ein guates Weinderl / Aus Südtirol という表現には、味わいを感じざるをえない。

夫人が死の床にあって上記のことを認めたのと同じ年に、フラウエンベルガーは、“Ho-la-re-di ri-di ri-di-ri, ho-la-ri ho-la-rei di-jo-la-ri というヨーデル音声学の著作権所有者として、著作権管理団体GEMAに登録されていたのである⁽⁵⁰⁾。

ガンツァーの息子と娘は、ベルリンの弁護士であり著作権の権威であるマルティン・シェーファー (Martin Schäfer) を代理人として、ミュンヘン地方裁判所 (Münchener Landesgericht)⁽⁵¹⁾に訴えを起こした。かれらは、GEMAの著作権報酬の相続人として、かつての父の盟友であり、父の作品のドイツにおける出版者であるエゴン・フラウエンベルガーを訴えたのである。かれらは、「カール・ガンツァーが『クーフシュタイナー・リート』の唯一の著作権者であったのか?」(War Karl Ganzer der alleine Ueheber des “Kufsteiner Lied”? という単純な事実を問題とし、GEMAの登録を変更することに同意することを求めた⁽⁵²⁾。

フラウエンベルガーがGEMAの監査役であったが、かれらは、敢えてそれを争点とはしなかった⁽⁵³⁾。

一方、被告であるフラウエンベルガーの代理人弁護士、ゲルノット・シュルツェ (Gernot Schulze) は、この歌が世界的なヒット曲になったこと、フラウエンベルガーがヨーデルの音声学を決定的に変えたこと、この歌は、以前には単調な「カッコヨーデル」(eintöniger Kuckusjodler) が付随していたことを指摘し、法廷でDi-da, di-da, di-da-da-daと口ずさんだ⁽⁵⁴⁾。

ミュンヘン地方裁判所は、カール・ガンツァーが唯一の排他的な著作権を有すると判断し、ガンツァーの相続人による訴えを認めた。従って、GEMAの登録内容の変更を被告が同意することが求められた。([資料1] 参照)

「フランクフルター・アルゲマイネ」は、有名なクーフシュタイナー・リートの一節、“Holla-rä-di-ri, di-ri, di-ri”が誰のものかが問われ、すでに死去している原作者の子供たちが唯一のヨーデルの著作権を持つと、ミュンヘン地方裁判所が判断したと報道した⁽⁵⁵⁾。

のちに、「ズェドドイチェ・ツァイトゥング」は、「『ホラ・レ・ディ・リ』に金は支払われない」(kein Geld für “Holla-rä-di-ri”)と皮肉まじりに伝えた⁽⁵⁶⁾。

〔資料1〕 ミュンヘン地方裁判所の判決

主文

数十年來、唯一の原作者としてGEMAに登録されていることは、カール・ガンツァーが事実上、クーフシュタイナー・リート (ティロルの真珠) という作品の唯一の著作権を占有していることを支持するものである。作曲家エゴン・フラウエンベルガーが同作品に対して、時期的に明らかにのちになって、著作権推定を請求していたことがこのことによって、著作権推定を揺るがすことはできない。

事実の概要

原告 (複数) は、作曲家、カール・ガンツァーの相続人である。カール・ガンツァーは、1950年に「クーフシュタイナー・リート (ティロルの真珠)」を作曲した。かれは当時、唯一の著作権者として登録された。この歌には、ヨーデルの間奏をもった一節が含まれていた。多数の大衆的な音楽家はこの音楽作品を様々な解釈表現で演奏していた。

被告は音楽作曲家、エゴン・フラウエンベルガーであり、自らヨーデルの間奏を考案したと主張した。かれの編曲があったからこそ、この歌はそもそも、このような名声を博すことができた。2001年にカール・ガンツァーが亡くなったのち、フラウエンベルガーは、音楽の編曲家として登録され、そのことによって、毎年、3万ユーロに上るGEMAの収入を得ていた。

原告は、自分たちの父親が唯一の著作者であるという見解であった。それ故、原告は被告に対して、GEMA の登録内容が変更されなければならないということに同意することを求めた。

判断理由

裁判官は、訴えを認めた。そのことによって被告は GEMA の登録の変更同意する義務を負う。

裁判所は、カール・ガンツァーが長年にわたり、GEMA に唯一の著作者として登録されてきたことをもって、カール・ガンツァーの著作権を認める根拠を説明した。単独で有する著作権を被告は反論できなかった。

ひとつには、ヨーデルの間奏が、本当に被告に由来するかどうかさえ、疑わしい。たとえその著作権推定が被告の有利に働くとしても、被告によるヨーデルの解釈表現がこの歌が有名になった原因であるかどうか、裁判官の見解では、定かではない。つまるところ、多数の芸術家が、この経過句を歌い、それを様々に解釈していたからである。

最後に、被告自身、カール・ガンツァーがこの音楽作品の唯一の著作者であることをすでに何年も前から認識していたので、被告自身、論争の過程で矛盾する行動をした。また、特に、時期的に明らかに以前にガンツァーが著作者と記されていたことは、優位性を持っている。

(典拠) Landesgericht München, Urteil v. 23.07.2009 – Az.:7 O 22065/08

9. フ라우エンベルガー死すとも訴訟は続く

2009年11月17日、エゴン・フラウエンベルガーは78歳の生涯を閉じた。クーフシュタイナー・リートの Holla-rä-di-ri, di-ri, di-ri を作曲したのは自分であるという主張を残して⁵⁷⁾。

かれは、多くの音楽作品のプロデュースを手掛けたが、とりわけ、Happy birthday to you のドイツ語ヴァージョン Zum Geburtstag viel Glück がかれに由来していることは、よく知られている⁵⁸⁾。

フラウエンベルガーの死後も、この訴訟は、ミュンヘン高等地方裁判所に場を移し、継続した。2011年に出された判決は、ミュンヘン地方裁判所の判決を基本的に踏襲するものであった⁵⁹⁾。

最終的には2012年、連邦通常裁判所の判決をもって、結審した。その結果、フラウエンベルガーにとっても、いくらかの利点があった。「クーフシュタイン・ティロルの真珠」(“Kufstein. Die Perle Tirols”) という商標は、今後もかれの会社に利用権が認められたのである。しかし、クーフシュタイナー・リートの著作権は、あくまでもガンツァー一人に属するとされた⁶⁰⁾。

このことによって、「クーフシュタイン・ティロルの真珠」という商標は、エゴン・フラウエンベルガーの相続人である edition-ffel-music-münchen の代表、マリア・マグダレーナ・フラウエンベルガー (Maria Magdalena Frauenberger) によって登録され、保護されることとなった⁶¹⁾。その一方で、フラウエンベルガーがクーフシュタイナー・リートの編曲者として登録されていたことによって生じていた権利 (クーフシュタイナー・リートの利用に伴う印税の1/12) は、相続人から奪われることとなった⁶²⁾。

10. そして、誰もいなくなった

2015年12月、クーフシュタイナー・リートを歌い、世界的ヒットへと導く共演者であったフランツ・ラングが84歳の生涯を終えた⁶³⁾。

カール・ガンツァー、エゴン・フラウエンベルガー、フランツ・ラングというクーフシュタイナー・リートをめぐる主役がすべて舞台から退いたのである。

しかし、歌は残った。

小括

クーフシュタイナー・リートは、第2次大戦後、新しい大衆音楽を求める雰囲気の中で誕生した。原作者であるガンツァーは、「ティロルの真珠」というタイトルで、「腕を組んで肩を揺する」のではなく、「ダンスをする」ための一種のタンゴとして、この曲を作った。アコーディオンを弾きながら、発想したメロディーが原曲である。歌詞については、ガンツァー夫人が関与した部分もあったかもしれない。

大衆音楽が大衆酒場で自由に演奏されるうちに、3拍子へとリズムが転換し、さまざまなヴァリエーションで歌われていた。

その曲の将来性を認め、ヨーデル王、フランツ・ラングを起用して、文字通り「プロデュース」したのが、エゴン・フラウエンベルガーであった。

この曲の著作権をめぐる訴訟の末に、ドイツ連邦通常裁判所の出した結論は、(1) クーフシュタイナー・リートの唯一の原作者がカール・ガンツァーであること、(2) フラウエンベルガーを編曲者として認めないこと、(3) 但し、「クーフシュタイン・ティロルの真珠」という商標登録をフラウエンベルガーの相続人に認めたことであった。

この第3点は、フラウエンベルガーが、ティロルの真珠であるクーフシュタイナー・リートを、真の宝石へと育てあげた功績の結果と考えられる。

注

- (1) *Berliner Zeitung*, 29.12.2001
- (2) *Berliner Zeitung*, 29.12.2001
- (3) Kneissl, about Kneissl
- (4) トーマス・ヌスバウマーの経歴および業績については Universität Mozarteum Salzburg, Thomas Nußbaumer Homepage; Universität Mozarteum Salzburg, Thomas Nußbaumer; Tiroler Volksmusikverein, MANNSCHAFT を参照。
- (5) Nußbaumer [2004]
- (6) Kohl [1899]
- (7) *Berliner Zeitung*, 29.12.2001
- (8) Nußbaumer [2004]
- (9) Härtel, Die Steirische, Stammtischmusi Klosterneuburg et Härtel, Die Steirische Harmonika. 『オーストリア音楽辞典』では、„Ziehharmonikaの別名としてツァーギンが指摘されている。同事典には、Ziehharmonikaの項目には、以下の記述がある。「1820年代、ブッシュマン家 (die Familie Bushmann) はフリーリード (durchschlagenden Zungen) を使った実験を行い、1821年にオルガンの音色に似た補助楽器としてムント・エオリーネ (Mund-Aeoline) を開発し、1822年にそれを蛇腹を使ったハント・エオリーネ (Hand-Aeoline) へと発展させた。ウィーンではC.D. デミアン (C.D. Demian) が1829年にアコーディオン (Accordion) の特許を取得した。それは、時を経ていわゆるウィーン・モデル (Wiener Modell) へと進化し、一方、ハント・エオリーネ・ブッシュマン (Hand-Aeoline-Buschmann) がさらに発展することによっていわゆるドイツ式アコーディオン (Deutsche Harmonika) が誕生した。これらの楽器はすべて、押引異音式 (wechseltönig) で (蛇腹を伸ばすのと縮めるのとは違った音程を生み出す) 全音階式 (diatonisch) であった。1850年ごろようやく、さらに発展したウィーン式シュランメルアコーディオン (Wiener Schrammelharmonika) によって半音階式 (chromatisch) となった。押引異音式、全音階式のウィーン・モデルは、今日、さらに改良が加えられ、シュタイリッシュ・アコーディオン (Steirische Harmonika) としてオーストリアで生き延びている。シュタイリッシュ (Steirische)、ツィアハ (Ziach)、ツァーギン (Zugin) とも呼ばれている。」(Haid, „Ziehharmonika“, in: Oesterreichisches Musiklexikon online) なお、アコーディオン製造の歴史については、ヘルムート・グートレーダー (Helmut Gutleder) がザルツブルク・モーツァルテウム大学 (Universität Mozarteum, Salzburg) に提出した修士論文 (Gutleder [2006]) が詳しい。
- (10) Nußbaumer [2004] et Estner [2007]
- (11) *Berliner Zeitung*, 29.12.2001
- (12) Nußbaumer [2004]
- (13) *Berliner Zeitung*, 29.12.2001
- (14) 山田徹雄 [2015年]、367ページ。
- (15) ÖBB-Postbus GmbH [2017]
- (16) Nußbaumer [2004] ヴァルター・ドイチュについては、Austria Forum, Walter Deutsch, 参照。
- (17) Estner [2007]
- (18) Estner [2007] ペンデルストアナーの Pendel とは「振り子」、それから転じて「毎日往復すること」を意味し、ストアナー (Stoana) はクーフシュタイン郡内にある牧草地 (Stoana Alm) に由来する。(Kufstinerland, Jausenstation Stoana-Alm)

- (19) Nußbaumer [2004]
- (20) Nußbaumer [2004]
- (21) Estner [2007]
- (22) 竹田年志が率いるアルプス音楽団は、2017年9月26日、銀座ライオン・音楽ピアプラザにて、タンゴのリズムによるクーフシュタイナー・リートを演奏した。筆者の知る限り、これが Tango Kufsteiner Lied の本邦初演である。
- (23) Nußbaumer [2004]
- (24) Nußbaumer [2004]
- (25) Nußbaumer [2004]
- (26) Discogs, Jodler Duo Gasser - Stadlmayr - Wildschönauerlied / Kufsteinerlied なお、アンドレアス・エストナー (Estner [2007]) はこのデュオをシュタットウルマイヤー&ガスナー (Stadlmayer/Gassner) と記しているが、正しくは、シュタットウルマイヤー&ガッサー (Gasser-Stadlmayr もしくは (Stadlmayr/Gasser) である。
- (27) Nußbaumer [2004]
- (28) Nußbaumer [2004]
- (29) Nußbaumer [2004] et Estner [2007]
- (30) オーストリアの著作権管理団体については、Walter [2015], p. 136参照。GEMA については、GEMA, Home 参照。
- (31) Nußbaumer [2004]
- (32) Estner [2007]
- (33) Nußbaumer [2004] この契約場所は、ヌスパウマーによれば、ガンツァーの狭い住居であるが、駅のレストラン (Bahnhofsrestaurant) で署名されたという指摘もある。(Berliner Zeitung, 29.12.2001)
- (34) Nußbaumer [2004]
- (35) Nußbaumer [2004]。このレコードは、フランツ・ラングが歌い、ルディ・クナブル (Rudi Knabl) がツィター、オットー・エブナー (Otto Ebner) が吹奏楽の伴奏をつけた。(Estner [2007]) 同時に、フラウエンベルガーは、各種の楽譜を出版した。アコーディオンと歌のため、シュタイリッシェ・アコーディオンと歌のため、ピアノと歌のため、ホーム・オルガンと歌のため、ツィターと歌のため、吹奏楽のためなど、多種類の楽譜を世に出した。(Nußbaumer [2004])
- (36) Estner [2007]
- (37) Estner [2007]
- (38) Nußbaumer [2004]
- (39) Pension Perle Tirols, Home
- (40) Nußbaumer [2004]
- (41) Landesgericht Innsbruck, 5 Cg 1005/74 vom 29.7.1976
- (42) Oberlandesgericht Innsbruck, 5 R338/81 vom 17.6.1982 bzw. 21.1.1982
- (43) Nußbaumer [2004]
- (44) Estner [2007]
- (45) *Lustige Musikanten*, 15.Jg., Nr.1, Jänner./Februar, 1988
- (46) Takeo Ischi 石井健雄 bei Rubin Records, KÜNSTLERINFO; Rubin Records GmbH, KÜNSTLERINFO Takeo Ischi; Hochschule Ludwighafen am Rhein, Ostaieninstitut, Kann denn Jodeln Sünde sein?
- (47) *Neue Musik Zeitung*, 23.07.09
- (48) *Hannoversche Allgemeine*, 23.07.2009
- (49) *Süddeutsche Zeitung*, 17. Juni, 2010
- (50) *Süddeutsche Zeitung*, 17. Juni, 2010
- (51) Landesgericht は「州裁判所」と訳すほうが合理的であるが、法曹界において慣例化している「地方裁判所」という訳語をあてた。同じ理由から Oberlandesgericht は、「高等地方裁判所」、Bundesgerichtshof は「連邦通常裁判所」の訳語を充てる。
- (52) *Neue Musik Zeitung*, 22.07.09
- (53) telemedicus.info v. 28.07.2009; Urteil LG München v. 23.07.2009
- (54) *Neue Musik Zeitung*, 22.07.09
- (55) *Frankfurter Allgemeine*, 23.07.2009
- (56) *Süddeutsche Zeitung*, 17.Mai 2010
- (57) *Bild*, 18.11.2009 et *Merkur*, 28.08.2009
- (58) Gedankseite de, Gedenkseite für Egon Louis Frauenberger
- (59) OLG München, Urteil vom 13. Januar 2011 –Az. 29 U 4615/09
- (60) Tirol orf, 13.12.2012
- (61) *Kleine Zeitung Steiermark*, 14 Dec 2012
- (62) Tirol orf, 13.12.2012
- (63) Online Focus, regional muenchen, 18.12.2015

参考文献

〔裁判資料〕

1. Landesgericht Innsbruck, 5 Cg 1005/74 vom 29.7.1976
2. Landesgericht München, Urteil v. 23.07.2009 – Az.:7 O 22065/08
3. Oberlandesgericht Innsbruck, 5 R338/81 vom 17.6.1982 bzw. 21.1.1982
4. Oberlandesgericht München, Urteil vom 13. Januar 2011 –Az. 29 U 4615/09

〔文献資料（紙媒体）〕

5. Andreas Estner, “Welthit aus der Postlerwohnung” 60 Jahre Kufsteiner Lied, *Volksmusik in Bayern* 24, 2007, Heft 3
6. Helmut Gutleder, Die Entwicklung der Harmonikaerzeugung in Österreich, Magisterarbeit, Salzburg 2006
7. Jodel-Prozess in München, *Hannoversche Allgemeine*, 23.07.2009
8. *Lustige Musikanten*, 15.Jg., Nr.1, Jänner./Februar, 1988
9. Thomas Nußbaumer, Wer Shrieb das Kufsteiner Lied?, *Kulturzeitschrift des Landes Tirol*, Nr4/04,2004
10. ÖBB-Postbus GmbH, *100 Jahre Postbus. Die Geschichte des Österreichischen Postbus*, 2017
11. Franz Firedrich Kohl, *Echte Tiroler-Lieder*, Innsbruck, 1899. 同書は、2000年に復刻・増補版（*Echte Tiroler Lieder. Ergänzte und kommentierte Neuausgabe der Tiroler Liedersammlung*, hrsg. Tiroler Volksmusikverein et al）が出版され、またデジタル版も公表されている。（Universitäts- und Landesbibliothek Tirol）
12. Urheberrechtsprozess “Kufsteiner Lied” – kein Geld für “Holla-rä-di-ri”, *Süddeutsche Zeitung*, 17. Juni, 2010
13. Michael M. Walter, *Grundriss des österreichischen Urheber-, Urhebervertrag- und Verwertungsgesellschaftsrechts*, Wien, 2015
14. 山田徹雄『ドイツ資本主義と観光』日本経済評論社、2015年

〔オンライン情報〕

15. Austria Forum, Walter Deutsch, in interrete sub: https://austria-forum.org/af/AEIOU/Deutsch%2C_Walter, 02.10.2017
16. *Berliner Zeitung*, 29.12.2001, in interrete sub: <http://www.berliner-zeitung.de/kufstein-hat-nur-wenige-sehenswuerdigkeiten-aber-einen-welthit-ein-ohrwurm-wird-50-16535670>, 10.09.2017
17. *Bild*, 18.11.2009, in interrete sub: <http://www.bild.de/regional/muenchen/jodelliederproduzent-frauenberger-tot-10507830.bild.html>, 08.20.2017
18. Discogs, Jodler Duo Gasser - Stadlmayr – Wildschönauerlied / Kufsteinerlied, in interrete sub: <https://www.discogs.com/Jodler-Duo-Gasser-Stadlmayr-Wildsch%C3%B6nauerlied-Kufsteinerlied/release/2472296>, 04.09.2017
19. GEMA, Home, in interrete sub: <https://www.gema.de/>, 03.10.2017
20. Gericht: Karl Ganzer ist alleiniger Urheber des «Kufsteiner Lieds», *Neue Musik Zeitung*, 23.07.09 in interrete sub: <https://www.nmz.de/kiz/nachrichten/gericht-karl-ganzer-ist-alleiniger-urheber-des-kufsteiner-lieds>, 06.10.2018
21. Gerlinde Haid †, Art. „Ziehharmonika“, in: Oesterreichisches Musiklexikon online, Zugriff: 6.9.2017 (http://www.musiklexikon.ac.at/ml/musik_Z/Ziehharmonika.xml)
22. Hermann Härtel, Die Steirische Harmonika in interrete sub: <http://www.hermannhaertel.eu/index.php?id=261>, 06.09.2017
23. Hermann Härtel, Die Steirische, Stammtischmusi Klosterneuburg, in interrete sub: <http://www.volksmusikschule.at/harmonika.htm>, 06.09.2017
24. Gedankseite de, Gedenkseite für Egon Louis Frauenberger, in interrete sub: <https://www.gedenkseiten.de/egon-louis-frauenberger/>, 08.10.2017
25. Hochschule Ludwighafen am Rhein, Ostasieninstitut, Kann denn Jodeln Sünde sein?, in interrete sub: <http://www.oai.de/de/wissen/ostasienlexikon/54-iii/1436-ischi-takeo-ischi.html>, 27.09.2017
26. Takeo Ischi 石井健雄 bei Rubin Records, KÜNSTLERINFO, in interrete sub: <http://www.rubin-records.de/takeo-ischi/>, 27.09.2017
27. Jodellieder-Produzent Frauenberger tot, *Merkur*, 28.08.2009, in interrete sub: <https://www.merkur.de/boulevard/jodellieder-produzent-frauenberger-533266.html>, 08.10.2017
28. Jodler-König Franzl Lang gestorben: „Musik durch und durch“, Online Focus, regional muenchen, 18.12.2015, in interrete sub: http://www.focus.de/regional/muenchen/musik-jodler-koenig-franzl-lang-gestorben-musik-durch-und-durch_id_5164446.html, 08.10.2017
29. Kneissl, about Kneissl, in interrete sub: <http://kneissl.com/about-kneissl/milestones-of-kneissl/>, 30.09.2017
30. Kufstinerland, Jausenstation Stoana-Alm, in interrete sub: <https://www.kufstein.com/de/erl/info/jausenstation-stoana-alm.html>, 02.10.2017
31. KUFSTEINER LIED: Ho-la-re-di ri-di ri-di ri - oder wie?, *Frankfurter Allgemeine*, 23.07.2009, in interrete sub: <http://www.faz.net/aktuell/gesellschaft/kufsteiner-lied-ho-la-re-di-ri-di-ri-di-ri-oder-wie-1827559.html>, 08.10.2017
32. “Kufsteiner Lied” - kein Geld für “Holla-rä-di-ri”, *Süddeutsche Zeitung*, 17.Mai 2010, in interrete sub: <http://www.sueddeutsche.de/muenchen/urheberrechtsprozess-kufsteiner-lied-kein-geld-fuer-holla-rae-di-ri-1.153275>, 08.10.2017
33. Rubin Records GmbH, KÜNSTLERINFO Takeo Ischi, in interrete sub: <http://www.rubin-records.de/takeo-ischi/>, 27.09.2017
34. Franz-J. Oller, Kufstein hat nur wenige Sehenswürdigkeiten, aber einen Welthit: Ein Ohrwurm wird 50 – Quelle: <http://www.berliner-zeitung.de/kufstein-hat-nur-wenige-sehenswuerdigkeiten-aber-einen-welthit-ein-ohrwurm-wird-50-16535670>

- zeitung.de/16535670 ©2017, *Berliner Zeitung*, 29.12.2001, in interrete sub: <http://www.berliner-zeitung.de/kufstein-hat-nur-wenige-sehenswuerdigkeiten--aber-einen-welthit-ein-ohrwurm-wird-50-16535670>, 10.09.2017
35. ORF, Streit über Holla-di-ri im Kufsteinerlied, 24.07.2009, in interrete sub: <http://tirvl.orf.at/stories/377524>, 10.09.2017
36. „Perle Tirols“ gehört ganz den Tirolern :Deutscher Bundesgerichtshof bestätigt Karl Ganzer als Schöpfer des „Kufsteiner Liedes“, *Kleine Zeitung Steiermark*, 14 Dec 2012, in interrete sub: <http://www.pressreader.com/austria/kleine-zeitung-steiermark/20121214/281749856671388>, 10.10.2017
37. Pension Perle Tirols, Home, in interrete sub: <http://www.perle-tirol.at/>, 04.10.2017
38. telemedicus.info v. 28.07.2009; Urteil LG München v. 23.07.2009, in interrete sub: http://www.art-lawyer.de/admin/modules/mod_newsletter/preview_nl2.php5?full&id=46, 06.10.2017
39. Tirol orf, Rechtsstreit über Kufsteinerlied beendet, Publiziert am 13.12.2012, in interrete sub: <http://tirol.orf.at/news/stories/2563027/>, 03.10.2017
40. Tiroler Volksmusikverein, MANNSCHAFT, in interrete sub: <https://www.tiroler-volksmusikverein.at/?staff=dr-thomas-nussbaumer>, 04.09.2017
41. Universität Mozarteum Salzburg , Thomas Nußbaumer Homepage, in interrete sub: <https://www.moz.ac.at/people.php?p=50860>, 04.09.2017
42. Universität Mozarteum Salzburg , Thomas Nußbaumer, in interrete sub: <https://www.moz.ac.at/content.php?id=787>, 04.09.2017
43. Urheberrechtsstreit ums Jodels im 《Kufsteiner Lied》, *Neue Musik Zeitung*, 22.07.09, in interrete sub: <https://www.nmz.de/kiz/nachrichten/urheberrechtsstreit-ums-jodeln-im-kufsteiner-lied>, 06.10.2017